

ロータリーミーティング

「人間性豊かな青少年に育てる為に、我々に何が出来るか」

コーディネーター
ご紹介

青森大学教授 見城 美枝子 先生

青森大学教授・エッセイスト・ジャーナリスト
早稲田大学大学院理工学部研究科修士修了
1999年4月より同博士課程に在籍
日本建築の研究を進める
TBSアナウンサーを経て、フリーに
海外取材を含め53カ国以上訪問
建築社会学、メディア文化論、環境保護論を講義中
著作、対談、講演、テレビで活躍

パネリスト
ご紹介

白井市教育長 船橋市立葛飾中学校教諭 (現 船橋市立前原小学校教頭)	今村 聡子 氏 古橋 玲子 先生
銚子ロータリークラブ会長 君津ロータリークラブ	仲田 博史 氏 河合 潤 氏

司会：

それではただいまから「人間性豊かな青少年を育てる為に我々に何が出来るか」と題しましてロータリーミーティングを行います。パネラーは白井市教育長、今村聡子さん。船橋市立葛飾中学校の先生、古橋玲子さん。銚子ロータリークラブ会長、仲田博史さん。君津ロータリークラブ、河合潤さん。そしてコーディネーターは、青森大学教授、見城美枝子さんです。

見城：

みなさんこんにちは。きょうは、「子供達の将来をどうとらえたらよいのか」ということからシンポジウムを開く事になりました。コーディネーターを仰せつかりました。皆さんと一緒に、現在日本がかかえているさまざまな問題点と学校の状況、いろいろと問題はありますけれど、今も刻々と子供は育てております。あまり大変だ大変だと失望していても、今を生きている子供たちに失礼な事と私は思います。今どのような環境の変化が起きているのか、実際に教育もどんどん変わっていますが。現場ではどうなのか、その中で私達は一体何が出来るのか、ここでいっしょに考えたいと思います。私自身も子供が4人おりますので時代の変化とともに学校の教育が変わる、地域の商店街をはじめとした、住環境が変わる。また子供が大きくなればその年齢に応じた家族の人間関係も少しずつ変わってきます。私自身が、教育を子供を育てる親という立場でコーディネーターとして参加させて頂いていますが、第14期の教育審議委員会の審議委員をさせて頂きまして、文部省(文部科学省)が、どのようなお考えを持っているのか、大変自分の問題としても日頃関わっています中か

ら話を進めさせていただきます。

きょうお集まりのみなさんが、御自分のお立場で、どのような事を日頃なさっているのか。また、今回の「人間性豊かな青少年を育てる為に我々に何が出来るか」と言うことについて、どのような問題点をとらえ、考えていらっしゃるか。まずは自己紹介をかねて、お話を頂きます。

白井市教育長の今村さんからお願いします。

今村：

皆さんこんにちは。白井市の教育長を今年の4月から拝命しております、今村聡子と申します。私は昭和46年に生まれまして今年で31歳になります。私の父が昭和19年生まれ、母が23年生まれ、ちょうど団塊の世代です。第2次ベビーブームで、子供の頃はまさに中学校はいじめが日本全体として物凄い時でした。中学生がトイレで自殺し、先生も入ってクラス全体でいじめをし、葬式ごっこをやっていた、ということがマスコミでも大きくとりあげられたそういう時代でありました。授業では毎月、業者テストを受けて、自分の偏差値がどれくらいかというのを見て、人数が多く激しい受験競争がありました。そんな時代を生きてきました。

いまは、白井市の教育長という非常に重い仕事を担当しています。自分の経験した学校の生活と今の学校の様子を比べますと、ずいぶん変わったというのが第一印象です。身近な例で恐縮ですが、私が小中学校にいた頃は、給食はみんな同じ量で全員残さず食べる時代でした。今の子供は好きなものを好きな量だけ食べれば良い、学校によっては大量の残飯が毎日出るという状況で、「子供の個に応じた教育を」ということです。もうひとつは、英語教育についてですが、従来から、中高大学と10年間してもさっぱり英語がしゃべれないと

言われております。私の時代は高校のときに初めて年2・3回位、ALTという英語の指導助手(外国人)が学校に入りました。白井市の例で言いますと、各中学校に一人、入っております。週に何回もALTに会うことができます。小学校でも年に10時間ALTの先生に入ってもらい生の外国人の方と接し、国際理解も含めた学習をしています。目下、教育委員会での最重要課題は、ひとつは、学習指導要領が変わったこと、学校五日制という二つの推進を、いかに保護者地域の方を含めて理解していただくかです。もうひとつは学力低下の不安が非常に広がっておりまして、それに対してどう対応していくのかです。ただ、私個人的に保護者の方とお話して何がどう不安なのかお聞きすると「円周率が3.14でなくて3と教える事になった、非常に困る」とおっしゃいます。では「教科書をご覧になったことはありますか」とお聞きするとそれは見た事がない。「どこで聞きましたか」と聞くと「テレビです」といいます。子供の実際を見ていないというのが正直な感想です。

見城：

ありがとうございました。私が団塊の世代ですから、どうしてこんな頭脳明せきな立派なお嬢さんが育ったんだろうか。私にも大学生が3人高校生が1人で、しかも男の子が3人女の子が1人という状況です。まさに今、女の時代だと思って伺っていたんです。もう女性の方が優秀で任せられる。私も最初が女の子でしたらどんなに楽だったと、非常に個人的な感情でお聞きしたのです。ちなみに立派に子育てをした親御さんはどうしてきたのか、ちょっと興味があって伺いますが、テレビを見ていいのは何時までですか？

今村：

ええと、8時までです。最大1時間。

見城：

今から間に合う方は、テレビは8時まで(笑い)。それからお菓子は、甘いものとかどうしても限界



を持たずに食べてしまう。よく口がきれいっていいんですが。(御飯を)ちゃんと食べてあとはずっと食べません。口がきれいに育つにはどうしたら良いのですか。

今村：

家で飲める飲み物というのは、水かお茶か牛乳か100%のオレンジジュースこれだけで、買い食いはいちもちろんだめでした。おやつは決まったものを、兄弟2人で分けてそれだけでした。

見城：

子育ての基本を、まだ子供で間に合うという方とお孫さんの世代だという方は、これ大変貴重な部分だと思うのです。やはり、青少年がどう育てほしいのかという時に、学校も大事ですが、家庭で、また、みなさんの御活躍の地域でどうなのか。こういった3点から考えて参ります。まずは(基本として)みなさんのご家庭ではテレビは8時まで。(私の)うちの場合は、テレビは食事しながら見せない、リビングで家族一緒に見ます。テレビは2台ありますが。リビングと母の部屋にしか置かないと子供達と決めました。それが良かったのは、子供達が母の部屋に入り、ベッドに小さい子たちが潜り込んで母とスキンシップをする。やはりテレビを頭から悪いといわないで見せ方、または置き方、というもあるかな。うちも牛乳と麦茶と水とトマトジュースになっております。でも、育ち方によって、DNAもあるかと思えます。親の考えがどうかというのもありです。皆さんと一緒に考えください。どうもありがとうございました。

それでは続いて葛飾中学校の古橋玲子先生をお願いします。

古橋：

こんにちは、葛飾中学校の古橋玲子と申します。お招き頂きまして本当に感謝致しております。いつも15歳以下の子たちと話をしていますから、本日はとっても緊張しております。よろしくお願

します。今、中学校の3年生を担当しております。総合学習の担当もしております。昨日、本校で公開研究会がありまして、発表会をしました。子供達3年生は「私の生き方と出会う」というテーマに、職業体験を通して感じた事を、自分はこんなように生きていきたい、大人の方、社会の中から学んできた事を自分の生活にこういうふうにかかしていきたく。これを「生き方宣言」という形で、体育館で学年の生徒達と、地域の方たちや他の学校から来られた先生方の前で宣言したのですが、その姿を見て「教師になってよかったな」と涙したあとなので、その気分がぬけていないところです。切れる子供である、心が育ってないとか、いろんな部分がマスコミでも言われていますし、問題視されていますが。夢とか、いい部分をみんな持って、耕してやれば、皆そういう心になれると実感しています。目的があれば、昨日の発表ではないのですが、たとえば合唱祭であるとか体育祭であるとか、それをやって形に残るものではないのですが。何かを得られるという、みんなで纏まってやろう、人を助けてあげよう、協力してやろう、そういう心を子供達は十分もっています。この機会をこれからも子供達に与えていけたらと思えます。昨日の「生き方宣言」についても、学校の力だけで行なえたわけではなく、「ぜひ職業体験を受け入れてください」というお願いを80ぐらいの事業所に、まる二日間ご迷惑なのですが、受け入れて頂きました。仕事内容だけではなく中学生にメッセージということで「社会人として生きるためにはこんな事が大事なんだよ」「時間を守ることや挨拶が大事なんだ」とあるいは「一日足を棒にして同じ作業ばかりして帰ってきた子」「一日やってきてもうふうふうって来た子」あるいは



「農業をやった子」もいます。職やゴミ収集車で朝五時の暗いうちから、ゴミを集めた生徒もいます。社会の中から子供達が学べることはものすごく大きいと思えました。教師あるいはお父さんお母さんが、同じ事をくり返し言うよりは、年に一回でも社会の中で子供達が教わる影響力はものすごく有ります。子供達は提言の中で「社会の中で役立つ人間に成ります」「相手の気持ちを考えなければ社会では生きていけないんだ」あるいは「大切でない仕事はないんだ」「自分の道を自分で決めて、絶対に僕は努力していきます」「誇れるものを、ひとつは持っていないといけない」あるいは劇団にいった生徒などは、生活はアルバイトで、役者の夢を追い続けている姿から「仕事は収入の為にだけじゃない」と実感として持てました。学校だけでは、教育はできないと感じております。あと職業体験に行くことによって、「こんな人になりたい」「生き方とか、人物像を持つことができた」「具体的に成りたい職業が見えてきた」という生徒が沢山おりました。社会のお力を学校現場にお貸し頂けるとありがたいと思えます。

見城：

古橋先生のような感じだと生徒もいいのではないですか。好かれてますか？

古橋：

そういう時もあるのですが。生徒指導、特に女子指導は特に厳しく、躰は躰としてやらせるので、だんだん煙たい存在になる部分はあるかと思えますが、一緒に泣けた幸せを感じることができるので、良いかなと思ってます。あと(私の)クラスにマドンナ命と書かせてます。(笑い)

見城：

古橋先生ご自身にもお子さんがいらっしゃるんですね。

古橋：

うちは娘が二人います。上は大学生で下は中学3年生です。本当のところは、よそのお子さんに

かまってる場合ではないのです。娘は小学生のときに「母をたたえる作文」で1回だけ賞状もらいまして、「私の得意料理はカップラーメンです」というのが書き出しでした。自分自身が家庭の中ではしっかりできていない。あるいは地域の中の一員として、何が出来るかなと反省する事ばかりです。今は、学校の仕事に追われている毎日です。

見城：

ありがとうございます。本当に教員の方々というのは大変です。よく小学校や中学校の先生は地域にもっと入って下さいと意見も出ています。だけれども、先生御自身の忙しさも大変です、先生が実際住んでいる地域になかなか参加できないジレンマもありと思います。古橋先生のお話を聞きになりながらも、皆さんが住んでいる学校の先生方どうおつき合いしていただけるか、お考えいただき、お聞きいただければと思います。ありがとうございました。

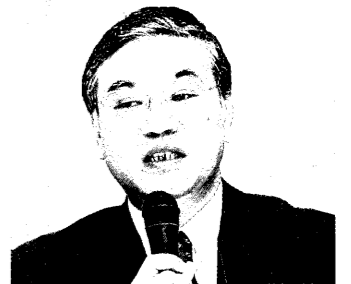
それでは銚子ロータリークラブから仲田博史さんをお願いします。

仲田：

こんにちは。銚子ロータリークラブ会長の仲田と申します。

中略

教育問題ですが、小中の市P連会長などを勤めまして多少はかかわりを持っていました。教育委員を2期8年程やりまして2年前に終わりました。私が教育委員でいたときに「学校っていうのはそんなに忙しいのかな、自分の目で確かめたい」、ある小学校に1日、朝7時半から5時半くらいまで、机をひとつあけて頂きました。教室を自由に出入りしたり、先生方が帰ってくるのを待つて話しをしたり、内側から見た学校を体験しました。私が一番問題





だと思いますのは、PTAの会合などで非常にパターン化した研修をくり返しています。土日ではなく、ウィークデーに「どこの文化会館に研修があるから集まれ、何人ずつ出しなさい」という動員がかかる。そして行ってみると、お話は毎回同じような講師陣の中から選ばれた方々のお話で、あまり刺激がなく新しい情報がない。そして、やり方も助言者という方がかならずついて、最後は学社連携、「学校と地域と家庭が連携すべきだ」という、水戸黄門の印箋みたいな形で結論として言い渡されます。「ははあ、そうだな」と帰って来ます。そのくり返しに、とてもついていけません。私は教育委員が終わった時に、ロータリーという社会的に認知された団体で、教育問題について市民がどのように考えているか。実際に子を持つ親が、どのように考えているか。世論を教育委員会にぶつけてみないと自分の方から変えようとしません。教育委員会は義務教育が守備範囲であって、市立高校は全くの独立国だ。というような雰囲気は銚子ではございました。いかななものかと思っておりましたので、小中学校22校の保護者を対象に一昨年、アンケートを致しました。学社連携というけれども、学校、家庭、地域のどこが担当するのが一番効果的なのか。決して守備範囲だけでいいというわけではありません。たとえば「人を殺してはいけない」という事、「他人に迷惑をかけない」という事、「学ぶ楽しさ」を教えるのはどこなのかを、細かく項目に分けて、自分の守備範囲をどう認識しているのか、明らかにしたいと思っておりました。よく学校に全部押し付けるとか、学校の方も家庭が悪いからと、お互いに責任転嫁をしている場面もあります。アンケートには市P連だとか、教育委員会と共同で実施しましたが、制度的に銚子の抱える「市立高校2校を存続させるべきか」を含めて、また「少人数学級を自己負担で、つまり銚子市の税金で作っていくのか」さまざまに聞きました。結果をシンポジウ

ムという形で市民の皆さんにお返しし、みんなで教育問題を考えました。ロータリーも、教育問題について少し距離をおいていたのではないかと。しかし、これから日本をささえていく若者達、次の世代を我々はやはり育てて、そして豊かな社会を自分達の世代だけではなく、次の世代に引き継いでいくことに力を注ごうと考えております。われわれのやったアンケートを九州の小林RCが、全く同じ設問で地域的な特殊なことを省いてやりました。ほとんどの項目が、銚子と同じでした。先程の、地域、家庭、学校の分担について、データはパーセンテージもほぼ同じということでした。学社連携といわれることの中身を、何をどう連携していったらいいのか。これから議論を深めていく必要があると思っております。

見城：

ありがとうございます。ちなみにそのアンケートの、たとえば「人を殺してはいけない」というのがどこがどう教えるべきか、皆さんどう考えたんでしょうか。学校が教えるべき事、家庭が教えるべき事、社会が教えるべき事、なにか具体例がございましたら。

仲田：

まずですね、「挨拶をきちっとすると教えるところはどこ」といえば、家庭が圧倒的に多いですね。「他人の話聞く」ことは学校が67.7%、家庭が37.7%となっています。「時間を守る」「約束を守る」「暴力をふるわない」「他人のいやがる事をしない」それから「人を殺してはいけない」といった事を教えるのはすべて家庭です。「身綺麗にする」「衛生に気をつける」ことも家庭です。「スポーツを楽しむ」ことについては、学校と地域がここでやっとならざるを得ないです。「思いやりの心」「善悪の判断」は家庭ですが、「自然とのふれあい」は家庭とそれ以上に地域が担うべきだと思います。あと、「郷土愛」「外国人との交流」などと申しますと、外国人との交流は学校がやや



多いくらいで学校と地域がすすめるべきとなっております。「日本人としての誇りを持つ」と、どこが教えたなら効果的かについては、学校、家庭、地域、比較的接近しておりますが、学校がちょっと多いくらいになっております。ちなみに学校、家庭、地域の三者の関係のありかたは、「互いに信じあう」が一番多くて47.5%。その三者が「公私を分けてお互いに、自己の考え方を伝えるべき」が29.0%で、三者が「ただ仲良くすればいい」「信頼関係を重視する」が21%となっております。それから、「連携の度合いはどう思うか」は、「もっと密接に連携すべき」というのは22%ですが、その次の「現状より少し連携を強くする必要がある」が52.2%で一番多いように思います。「今のままでよい」が22%です。否定的な「連携を深める必要がない」は0です。

見城：

はい、ありがとうございます。続いて君津ロータリーの河合さんお願いします。

河合：

皆さんこんにちは。君津ロータリークラブの、新世代のための委員長の河合と申します。いまお三方からお話がありまして、見城先生を含めて皆さん学校教育に関係している方ですが、

中略

子供達の教育で、学校ではない社会教育のボーイスカウトの指導者を20年ほどしております。昨年まで杉並の地区コミッショナーもしてました。家庭、学校、社会の中で、子供達の青少年教育、



子供たちの教育と言うのはフォーマル、インフォーマル、ノンフォーマルエデュケーションと3つあるのですが、フォーマルが学校で、インフォーマルが家庭、ノンフォーマルが社会で、我々

は3つ目のインフォーマルな社会教育の一環で、学校とは別の立場で、お話をさせて頂きます。年令は昭和22年生まれで、ちょうど今村さんの父親の団塊の世代でございます。我々の世代は急にまわりの施設が、多人数に耐えられないので団塊の世代になったのです。我々は競争と我慢の世界に生きてきたんです。例えば学校でどこかに出掛けバスに乗る時は、早めに行かないと補助席にしか座れない。それから戦後の時代ですから親は厳しくて、例えば食べ物を残したら叱られる「残したらいかん」などです。だから、子供の時の習慣は恐ろしいもので出たものは全部食べますから、今では、腹のまわりに全部ついてしまい非常にこまっています。こんな生活を送って参りました。テレビは1時間しか見せない話が、さきほど今村さんからございましたが、私も男の子が2人で社会人と、高校生がおります。けっこう厳しく躰をしてきたと思っております。たとえば、私の子供の世代はファミコンで、子供が帰ってきて「お父さん、ファミコン持っていないのはウチだけだよ」というので「最後から2番目になったら言ってこい」といったら、とうとう言ってきませんでした。やっぱり「自分の思うままにはいかないんだ」と家庭で教えていきます。たしかに、今の子供達は昔の子と比べて軟弱です。20年前と今と本質的なところは、決してダメになったのではないと思っております。私が、子育て教育を考えるときに3つありまして、1番目は、今の大人達が子供達を甘やかして育てていると思っております。特に戦後は自由を尊重しますが、自由を尊重するのではなくて放任する、これは家庭も学校も、そして社会も同じです。我慢をするとか、あるいは思いどおりにならない事を教える必要があると思っております。それから2番目には、教育の中に人間性、感性が軽視されています。私は、心の教育と呼んでいます。学校教育には、知育、徳育、体育のバランスをとる必要があります。いまは、知育優先主義できたものから、徳育と



というのが軽視されています。最近はITがさかんになっています。非常に便利で、時間に関係なく、空間も日本とアメリカでも、あるいは人間と人間が接していなくても会話が出来ます。時間、空間、人間の間を飛ばしている間抜けの技術です。そのために、心も抜けてしまっています。心の教育を子供たちにしっかりと育てていく必要があります。家庭教育、学校教育、そして私達の青少年教育もそうです。その中で、もの創り、自然を体感する体験教育をやらせると、子供達に言葉では言い表せない感動を味あわせる事ができます。自然や生活体験が子供達の心を育みます。これは、1000メートルを越えた山に登った、海や川で泳いだ、あるいは生活体験も母親の手伝いをして食器を洗ったりとかです。それから、道徳的な体験です、子供をいじめていたら止める、電車の中では席をゆずるなどです。アンケートをとり、集計をしたところが、生活体験、自然体験が豊富な子供ほど道徳観が高いことができています。生涯学習審議会の答申を見て頂ければ分かります。この生活体験、自然体験を実際に子供達にやらせる事が、子供達の教育にはきわめて効果的です。ボーイスカウト運動は野外の活動をしてきたので本当に効果的だと、実際の経験を通して思っております。経験をお話しますと中学生を30人ほど連れて北アルプスの縦走をしましたが、その中で1000メートル以上の山に登った事のある子は2人、残りは全部初めてです。ボーイスカウトをやっている子供ですから、一応ハイキングとかは出来ますけれど、3000メートルの山に登るとなると愚痴がたらたらです。もう疲れた、暑いとか、それをなだめながら連れていきまして、次の朝4時半に起こしまして山頂に行ったんです。まだ眠いとか、文句を言ってきましたが、日の出になり明るくなって、山の500キロメートルくらい先まで見えてきたら、今までぐちゃぐちゃだった子供達がみんなシーンとなりまして、見つめている。やがて、太陽が

登ってきて、赤い光がさーっと差し出したら、ある子供が突然バンザイっていったんです。そうすると、残りの30人が全員バンザイ、バンザイ、バンザイって大合唱がはじまった。これは別にバンザイでも何でもよかった、感動を言葉に表わしたかったんだと思います。今まで体験の全くない子供、文句をたらたら言っていた子供が素晴らしい感動を味わうこと。いくら本に「3000メートルの山に登って日の出を見たら視界が500キロで、澄んできれいに見えました」と書いて読ませても分からないと思います。体験教育はきわめて効果があり、取り込んでいくことが必要です。人間性の教育とちょっと絡みますが、3つ目は、個性とかリーダーシップが欠除しています。日本の子供は自我の確立、自主性というのが遅れています。どちらかというところ今の教育は一律教育ペースをそろえる形で個性を殺す教育をしている、あるいは、リーダーシップを発揮することに対して非常にやりにくい教育になっています。一昨日に出た、教育基本法の中間答申にも「ひとりひとりの個性に応じてその能力を発揮する教育をする」と書かれておられて、やはり個性を引き出してやる教育が大切です。それから、リーダーシップを発揮できる教育を折り込んでいく形で、子供達の育成をしていくことだと改めて思っています。

見城：

ありがとうございました。河合さんのような方が子供達を引っ張って山に連れて行って下さる。これは昔も今も変わらないですね。私なども、川で泳ぎを習った時に、だれか自分の家のお兄さんとかまたは近所のお兄さんとか、責任もって連れて行ってきて、覚えていくとか、少し、遊びつて言うのでしょうか、「これは教育ですからまず本読んで、さあ、実施してみましよう」というのではなくて「行ってみるか」と、実は私達が随分いろんなことを体験して、その中から育てられてきたと思いますが、その本当にまさに担ってらっ



しゃいますよね。

河合：

見城先生がおっしゃったことで、私達と同じ年代の方、あるいはそれ以上の方が多かったので皆さんご経験あると思いますが。我々の子供のころは、ガキ大将がいて、それに何人も子供達がひついて、年代の違う子供達が、一緒に固まりになって遊びました。そのガキ大将というのが、ちゃんと子供達の面倒見て、連れていきます。このガキ大将制度が今は完全になくなっています。何か他の形で作っていくのが大事です。育った子供が必ず次はガキ大将になったんです。それを、他の教育体系、青少年教育のグループとかがやればいいんです。

見城：

君津の方では頑張ってボーイスカウトでやっているようですが、私は滋賀県のキャンプとかが大好きな先生が初めての夏休み冬休みの時に、子供達をつれてキャンプに行くことから始めて、続けていくと小学校卒業すると先生とは別になるから本来なら切れるんですが。まさにガキ大将からガキ大将へと継続していくのではないのですが、その時にできたグループがあります。それは自分たちは「先生やこの小学校とは別れるけど、やっぱり先生と中学へ行っても夏休みに行きたい。」そしたら、先生が「じゃあ、おまえらは下の小学生達の面倒みるか。それから、費用は自分で払うか。面倒みるからただじゃなくて全部自分で参加費用払って、しかも面倒見て、それでも参加するか？」って言ったら、「参加する」って始まった「近江の子」という近江の子供達ですけど、そのグループが今は大きくなりました。そして、「広島の子」というお隣の広島にがんばった先生がいて、だんだん連係して、当時の文部省の関係の学校外活動をしている先生が、沖縄に関係がある。じゃあ、沖縄にキャンプにいこう。結果として「沖縄の子」というのができて、そしたら四国

の四万十川を筏で下りたいと言う子が出てきます。それをやろうと四国の子と連係して、四万十川を下る。学校に行くのがいやだと、不登校、登校拒否とかいわれますが、子供達にどうしたらいいかって、自分達で考えて同じ子供同士で声かけたら、もしかしたら、やりたい事を言ってくれるかもしれないと思うので「何かやりたいことある？」っていったら、最初はもう「やだ」と「出ない」といいました。ところが先生とか大人が言うのではなくて、子供が子供に聞きに行くうちに子供が「キャンプやりたい」とか言い出したので、子供達が企画した、不登校の子供と一緒にキャンプというのが成功致しまして、すごい活動しています。RCのみなさんにもぜひ記憶して今後の活動に役立てて頂きたいのです。随分援助して下さい。、地元のRCの方々が、お金だけではなくて、やはりお顔が広く、いろんな人間のネットワークを使って、カヌーやボートを集めてくる人、テントを安く購入する方、その地域の方との連携プレーで子供が育つ。子供達は琵琶湖のクルーズ、ミシガンとかいろいろクルーズがあるのですが、そのクルーズをやるということになったら、それを全部自分達で琵琶湖湖畔に机出して、受付から何から全部子供達でやるんです。大人は出る幕がないのです。この元気さにやはり関東も、負けられない感じがしました。君津を中心に頑張ってください。

河合：

先程言った生涯学習審議会の答申も、自然体験、生活体験というのを地域で子供達に味あわせるシステムを創り、地域と社会、家庭と一体になって子供達を育てるといってました。今、まさに地域の中で、できることをやっていく必要があります。

見城：

RCの方は地域の中で、人的ネットワークを発揮していただきたいと思います。さあ、今までにいろんな問題がでてまいりました。どこで挨拶を躰



けるのか。家庭でとありましたが。今、子供達の環境としてはいろんな意味で危機が子供を取り巻いています。これが、一応社会状況として、少子化の危機、学力低下の危機、それともうひとつ日本人としての志とか、礼儀がない、言葉遣いが悪い。挨拶ができない。時間は守れない。いっぱい日本人として、危機が言われていると思います。まず、躰マナー、倫理観いろんなこと、礼儀、挨拶や、人を殺したり、ウソをついてはいけないといったような倫理観もあります。ここからはもう御自由にお考えを述べて頂きまして、子供達の日本人としての人間性の危機、日本人としてどうなんだらうという、お考えありますか。それぞれのお立場で。どなたからでもけっこうです。

河合：

それでは、日本の中で今言った、躰だとか、倫理だとか、道徳だとか、きわめて薄れていると思います。この間の議論の中で皆さんも同じ意見ですが、特に戦後日本の修身や、道徳教育を軍が悪用して、戦争に走ってしまうという反省と、GHQの政策もありまして道徳教育をやめた。やはり、日本の中に基本的な道徳教育が伸びてこなくなりまして、いろんな問題を起こしていると思えます。家庭の中でも昔は非常に、お祖父さんや親が厳しかったけれど、すっかり言わなくなったとか、そのために子供達が倫理観、道徳観がぜんぜん育たないで大きくなってしまふことが非常に大きな問題です。大変だなあというのを気付いてない親とか社会人が沢山いることがもっと問題だと私は思えます。

見城：

家庭と学校の教育力の低下と躰も含め、倫理観も道徳観も含め低下が言われてるんですが。学校の現場ではどうですか。

古橋：

小学校の先生とお話する機会が時々ありますが、前は中学校が荒れていて、いじめとか校内暴力と

か中学校が大変でした。今は小学校一年生が一番大変で、小学校一年生の少人数教育の策が起きています。小学校の一年生が教室に一日、授業一時間座ってられないので、まず、そこからのスタートです。どうしてそうなるか、その前の幼児教育の部分にあると思います。学校と、家庭と、地域と連携して子供を育てていくべきだとは思いますが、そういう現状があるのは事実のようです。現状をふまえてこれから、学校でお預かりした以上育てていくわけで、子供たちが躰のできないまま、中学校にあがってきて、思春期むかえる、これは大変だという危機感もまた持っております。

見城：

いい意味での我慢、だまって聞くこととか、社会性というのを身に付け、ルールを身に付けていくことだと思います。教育長さんとしてはいかがですか？

今村：

ちょっと、話がずれますが、いろんな子供がいます。一般的には、見えないところで学校とか教育委員会が大変なのは、「配慮を必要とする子供」という言い方をしますが、いわゆる問題児への対応で、いちばん大変なのは親が完全に放任と言うか放置して、それでどんどん荒れてくような子供がいます。たとえば子供が学校に来なくなると、どこに行ってるかという、たまり場で似たような子供が集まり、昼夜ないような生活をしている。最悪な状態ですと麻薬を大人が持ち込んだりして、どんどん非行のほうに引きずりこんだりします。そういうところに、学校の生徒指導担当教諭が、夜遅くまで説得をして家に連れ帰って親の方に「よろしく願います」とたのんでも、結局親が子供に外へ出ないように言う事ができないのです。それは、ある意味親の方が我慢して、自分を律して、子供に厳しくできないでいます。子供に我慢をさせることがあると思いますが、親の方もどれだけ我慢できるかも、問われてくる場



面もあると思う事が、教育委員会にいますとあります。やはり、このような状況については、個人のプライバシーがあって、先生がこの場では言えないし、私でも白井市ではこういう例がありますとは言えないので、なかなか表にでてこない話です。学校教育の世界では、非常に大きなウエイトを占めている地域もあると思いますし、時期によっても、学年によってもあります。そんなことも是非知っていただければと思います。

見城：

子供は自由と言う権利もあり、守られてると思いますが。親も自由な教育でと、ひとつ履き違えると放棄になるし、子供にとって今の社会状況で危ないところに即行くことですね。仲田さん、何かご意見ありますか？

仲田：

アンケートで「親と子供のふれあいは家庭の中であるか」と問うと、あるという数値がでています。「まあ あるほうだと思う」が64.4%、「たっぷりある」が21.1%です。これで約90%です。「子供を叱ることがあるか」の問いに対しては、やはり「結構ある」「たまにある」で、両方で96%くらいあります。子供にコミットメントするとか、関わる、かまってあげる。大人でもそうですが、かまってあげないと否決されちゃうということがあります。どんなときに叱るのかという問いかけに対しては、「口答えをしたとき」「兄弟とけんかをしたとき」「公共の場で大きな声を出したとき」「ゲーム遊びに夢中であまり家族の調和がないと思ったとき」「人間的に行ってはいけないことをしたとき」が高得点なのですが、客観冷静なこともあるんですが。親が、自分自身がヤキモキする、いらだつことで感情的に怒る、叱るということも半分以上です。やはり自制心を親の方で、我慢ということを働かせながら、しかし、放っておきざりにしないで、かまってあげることが必要です。実際にアンケートの場合には見栄と

か立前とかがありますので、常識的にいいほうにマルをつけるということもありますから、その通りには受け取れませんが、コミットメントする時間はたっぷりあるというならば、もっとその中身が、質的な関わり方にもう少しメスをいれていく必要がある。一緒に家の中にいる時間はあってもどう関わっているかが問題だと思います。

見城：

訓示の訓ってありますね。訓のない時代っていう感じがします。ちょっと前の時代の人でしたら家訓というのがあり、それを読んで「これがわかるか」「こういう事だ」と言えたんですが。戦後、訓というものも、学校もなくなりましたし、ある意味では、個人の力でどこまでできるか。やはり、能力がなければ親は放棄して「先生にお願いします」学校では「とんでもない。それは家庭でやってください」気がつく子供が放浪している状況があると思うのです。学校としても、中学校で引き受けるには小学校でしなかった。小学校の先生は、幼稚園でしないからこうだ。私も耳にします。でも、子供は一度その時期を逸したらもうダメなのか。親が、家庭でやってくれなかったけど、どこかで改めさせてくれる。今までの大人も育ててきたと思いますが。どうでしょう。

河合：

躰みたいな、基本的なものは家庭でしっかりと、やらなければダメだと思います。家庭で出来てないものを学校が代わってやろうといっても、そこまでやることはできないと思います。学校が引き受けてしまうのは、責任感なのか思いあがりなのか分かりません。親がやるべきところはきちっとやらなければならないと思います。ところが、親ができない問題がいくつかあります。それを、家庭でするものをどうやって支援するかを考えていけないと、学校で代わって教育しますということではできないと思います。



見城：

どうですか？古橋先生。今、学校だけに押し付けたら無理だと確かに思いますが。

古橋：

学校生活や人とのふれあいの中で、何かができる自信や自分の存在感を感じる事ができたら、新たな夢を持って頑張っていく姿を見られます。背が伸びるのが個人差があるように、心も個人差があります。同じクラスの中でも、腕白坊主で、中学3年生でもちょっといだしたり、後ろからつついたりとか、人がいやがるようなことを言ったりする生徒もいますが。その子の良さはまた別のところにあります。クラスの中、家庭の中、学校の中で認めていけば、ゆっくりと遅くてもその子は自立して、頑張っていける気持ちがあると期待を持って、学校では関わっていこうと思っています。家庭の状況もありますが、事実その子の家庭の状況は、その子が選んだわけではなくて、なりたくてその家庭に生まれてきたわけでも、なりたくて荒れた学校にいるわけでもないわけですから、そのところをふまえたうえで、学校としてはこの子に、何をしてやれるのか、教えてやれるのか、支援もしなくてははいけません。大人が教えるべきはきちっと教えて、ダメなことはダメと言ってやるのも大事なことです。教える場面は、家庭、学校といつも関わっているところ。昔私が小さい頃も子供会とお祈りがありました。近所のおじさん、おばさんたちと出かけて行きました。近所のおじさんたちに声をかけられたり、あるいは、いたずらしてて怒られたりという場面もありましたけれども、今は、おらが学校という気風が地域の中に全体的にないのでは。もっと地域で関わって頂ける気がします。

見城：

人にいろんな郷里があると思いますけれども、学校も郷里ですよ。どういう小学校だったのか、そりゃあ嫌な先生がいて、もすごく可愛がって

れた先生がいたとしても、郷里に変わりはない。そこがしっかりあることはやはりある時、罪を犯しそうになった瞬間に、ぐっと引き止められる。あの先生がいたから、友だちがいたから、大事な事ですね。新時代の教育基本法の中にも、最初に「新しい時代を切り開く心豊かなたくましい日本人を育成する」がうたわれて、ひとりひとりの個性に応じてその能力を最大限に伸ばす視点で、学校教育は中心的な役割をはたします。心身ともに健康な国民の育成なのです。同世代の子供の共同生活を通じて社会生活を身に付けることができる場です。少子化になって、なおさら重要だと思えますが、共同生活、共通の場、二つ矛盾している部分と、学校だからこそ共同で、集団で育てられるべきだといわれる。このへんに関して何か提案やご意見ありますか？

河合：

少しずれるかもしれないけれど、今、家庭とか学校とか地域の役割論みたいな話になっていると思います。先程言いましたように、根本的な羨ましいなものはやはり家庭でやって、もちろん、親のしっかりした愛情で、人間性、感性を育てるのが家庭の役割です。その次に、学校が、社会、コミュニティの中で生きていくわけです。その社会の中で役立っていく人間を作る、その教育を学校でやると思います。ですから、共同生活とか、チームワークとかを、学校の中で育てていくことが非常に大事で、大きな役割だと思えます。

見城：

今は、週五日制で、学芸会もとばさないと、カリキュラムをこなさきれない。運動会2年に1回にしますか？と冗談でしょうけど、分かりやすく言うと、集団でみんなできつくりあげようとする時間がないと、それよりこの分数を教えなければ、その時間が削られていると、学校側から、あるいは勉強を心配する親の方から出てくるのですが、



そのへんはどうでしょうか。

今村：

その子供の個に応じた、個性を生かしていく教育と、もうひとつの学校の機能として、なぜ学校が集団で学習活動をしているか。擬似的な社会を作って、その中で他人と共存しながら調和をとりながら生きるためには、例えば公共心が必要だったり、倫理観とか、道徳観とかを学んでいくのが学校教育の重要な機能の一つです。おそらく中教審の今回の中間報告というのは、いままで一般的に個性と集団とか社会性が、何となく相反するものというイメージだったですけど、実は集団で調和をもって互いに協力していくためには、それぞれの個人個人が、個性と言うか自分が何者か、自分がどういうものを持って、社会に貢献していくのか、あるいは他人にどう関わって、影響を与えるのか、そういう「個」があるからこそ集団の中で輝ける、集団がなければ個があっても生かせる場がないのだと、改めて示したものと私個人的には解釈をしました。ですから、学校教育の中で今まで別に個を殺した教育をしてきたわけでもなく、当然集団の意味と言うのも感じながら学校教育がなされていますが、ここ十年の流れがどうしても個性個性と言われてきて、それ以前の学校教育における集団活動の意味を否定されてきた風潮もあっておそらく、現場の先生方は非常に苦しいお立場でいらっしゃると思います。個性個性といわれながら、学級数は40人で変わらない中で、個性を40人分いっぺんにみなきゃならない。随分大変な思いをされています。個性を見ると言うことは必ずしも集団としてのルールを無視していいというわけではないと個人的には思っています。

見城：

そのわけでは、総合学習に非常に期待が集まっています。今までカリキュラムで決められた教科書の中でここまで教える。次までにここまで教え

ると。先生方は学習指導要領の中である程度の期限を切りながら教えていくのですが、その中に新しく総合学習が取り入れられて、実際にいい結果が得られている。いい例を見つけて、むしろ、全国に知ってもらうのがよりいいだろうと思えますが。どうでしょうか。古橋先生。

古橋：

総合学習はまだスタートしたばかりで、本年度から完全実施です。本校は一昨年から始めまして、3年実践してきました。体験ですが、やりっぱなしだと深まりがでてきません。その体験を通して考えさせる時間、自分自身を振り返らせる時間をしっかりと確保してやればその体験がこれからの生活に生かされると思います。体験についてもポンと行ったのでは意味のないものになります。いくまでの、事前準備、事前学習をして自分で課題を持って、テーマを持って行くところに意味があります。テーマを解決する力が総合学習のねらいの部分にもなっています。総合学習を通して、自ら課題を持ち、自ら解決する力は生きる力にも繋がります。総合学習、体験だけに終わらず日頃の学習、普通の教科の中にも生かされてくる力にもなります。学び方を学ぶ、あるいは自己教育力を、この総合学習を学ぶことにより、がんばってついた力が、必ず教科に戻っていくと思います。総合学習はすごく価値のあるものと3年間やってみて思っております。生徒の中にも、「かけがえのない自分自身を見つめる時間であった」「社会人として生きていく為にとっても大事な時間であった」「くずの葉タイムがあってよかった」「自分がやったことが将来役に立っていくだろう」という、学習後の感想が出てますので、総合学習だけが学校の勉強じゃないのですけれども、ふだんの生活の中でも、他の中でも、あるいは道徳観と関連させながら心情を深めていくような教育がしていければ、少しずつ育っていくかなと考えています。



見城：

総合学習の中に、どういう学習が取り入れられていますか？たとえば農村体験をすとか。いろんな所がいろいろ努力しています。商店街に行って働く体験をしましょう。さっき先生がおっしゃったような職業体験とか、ありとあらゆる事ができる。学校、各学年で、努力してらっしゃるようです。

古橋：

総合学習は座学ではなく、外へ出てやるのを基本にしています。最初は学び方を学ぶということで本や、インターネットで調べる学習を中心としていました。その発表会でまとめをさせたところ、「こんな事が分かった」で終わってしまいました。これが分かっただけでは意味がなくて、その次の学習からみんな外へ出て、自分の力で自分のテーマに沿って、自分の力でアポを取ってお願いをして出かけて行って、お話をうかがったり、あるいは体験をさせてもらったりする学習をしてくる。本で見ただけの学習ですと実感としてわいてこないけど、訪問先で大人の人に「それは違うんだ」「社会はこうなんだ」と具体的に教わった事の方が、心に残ってくると思います。昨日の発表会に至るまでには、6回の総合学習、学年に2回行ってまして、一年生のとき「われら国際人」ということで、世界を、自分自身がトムソーヤになって世界を探検しようと、世界に視点をあてて、世界の様々なことを、身近な地域で調べられることからスタートしました。それから「未来予想図」と題し、将来の自分を予想して、興味を持っている職業について調べてみました。調べた事とただ訪問調査だけさせました。世界から始まって、2年生になって、日本再発見ということで、鎌倉を通して、日本の伝統文化だけでなく、日本の環境問題だとか、あるいは福祉問題だとかも鎌倉で学習してきました。

見城：

カマクラって鎌倉市ですね。雪のかまくらでなくて。(笑い)

古橋：

鎌倉市です。校外学習とのドッキングですが、「日本再発見」をテーマに鎌倉の街づくり、リスの公害、アライグマが住宅問題を起こしているところ、観光客が残していったゴミはどう始末しているのか、美観を守りながら新しい街づくりをしているのか、日本人のひとりとしてどんな心構えが大事なのかという学習を2年の最初にしました。世界、日本、次は、地域を調べてみたい。船橋はどうなっているのだろう、子供達の中から自分達の地域について知りたいと課題を持ちまして、「参加、参画」を狙いとしてやりました。実際に街に出てゴミを拾ったり、福祉施設へ行ってボランティアをしたり、大人の人とふれあいながらそこで体験をさせていただきました。5回目、3年生ですが、京都に行ってきました。京都についても子供達が、アポをとっていくところをすごく冒険ですが、やらせてみました。

見城：

京都はアポイントを、どこにどうやってとったんですか？

古橋：

京都については、子供達が興味のあること「私の生き方と出会う」というのが年間テーマで、前期が「京都の人たちとの語りを通して」後記が、「今回の職業体験を通して」ということでした。一年間、義務教育最終学年なのでとにかく胸を張って誇りを持って、自分の生き方を掴んで卒業させたい、「こんな人間でありたい」と考えさせ、自分自身を、自己の確立を持って、卒業させたいと願いを込めてしました。京都におきましては、今までは旗をもって後を付いて行きました。

見城：

いわゆる修学旅行タイプですね。



古橋：

修学旅行タイプがだんだん体験学習になってきました。八つ橋を作る工場にみんなで行くとか、京都の伝統を産業的にやるところにクラスや、班で行ったり、教師が出した中から選ばせるのも修学旅行ですが。総合学習でやることは、とにかく自分で会いたい人をまず見つける。自分はどんな人に会いたいのか。どんな生き方をしたいのかをまず、出しました。そこから課題を持ってやらせたいんですが。京都の街はものすごく伝統文化が大事にされながらも、最新の駅があり、新しい都市がある。どんな都市づくりをしてるのか、市役所にアポを取ったり、島津製作所、京セラとか、日本の最先端に行く企業は、どんな気持ちでやるのだろうか、どういう視点をこれから僕達は未来に持っていったらいいのだろうかというテーマを持って行ったり、それを探すのには、何回電話をしても、いろんなところに電話して断られて、断られて、それでもこりずにとにかく自分で見つけるんだというところで、やっと84箇所全部見つけることができました。

見城：

諦めないってところがいいですね。

古橋：

はい、これが社会なんだってところを、そんなに簡単に。

見城：

それ重要ですよ。いつでも大人が「はい、いいですよ」って受け入れてくれたら大間違いだと。

古橋：

そういうところも考えさせることができましたし、みつけていく所ですので、本当に楽しみに、自分がようやくアポをとったところだという、意識を持って出掛けましたので、向こうに行っからの礼儀とか、学習する姿勢とかについては、京都の方からほめていただきました。今まで学習したことを、訪問調査でしたので、最後に、自分

が掴んできた生き方を検証する場ということで、職業体験をお願いして行きました。

仲田：

古橋さんから学校の中での総合学習の取組みについて、かなり成功事例が発表されたと思いますが、私どもがシンポジウムをしたときに、地域企業の研究者が、バイオテクノロジーでかなり進んだ研究をされているそのリーダーの先生が、総合学習に不安があり、学力の低下を懸念しながら、地域が、子供達に何が出来るか。例えば、数学の副読本を自分だったらどう作る、銚子市の教育委員会が作るのであれば、自分はいくらでも協力しますと申し出られました。現状は、総合学習はいくつかの教科を文字通り総合した取り組みをして、先生方が何をしたいのか分からない。文部省の方から、いくつかのサンプルテーマを出されると、全国で一斉にそのテーマにそってやるということに近いのではないかと思います。その中でオリジナルなものをやっていく。私個人で今、銚子にある犬吠埼の灯台に非常に感心を持って、3年位色々な角度から調べています。理科・社会・英語・音楽・美術など、教科のいろいろな角度からせめていく。ひとつの地域の近代化遺産に光をあてて、教科を組み合わせる事ができないだろうかと考えます。学校ではこの単元に何時間かけて教えるかというようなことがあります。犬吠埼灯台について」というテーマで10時間かける。「灯台のレンズ」というのは理科の光学です。レンズのしくみとか地球は丸いが灯台の光はどのくらい届くのだろうか。社会科は、西洋式の灯台はどういうきっかけでいつごろできたのか？明治の幕末維新の下関条約に伴う外国との条約で、半ば外圧で造られたとか。資料をインターネットや、文献が集中的に納められている横浜の開港資料館、国立公文書館に出かけて行って集める。英語の教科は、外国人が設計して造ったものです。当時の外国文書が残ってます。英文を訳して、西



洋の技術を日本に伝播する、技術移転のプロセスというものを知ることができます。音楽は、イギリス民謡の「灯台守」が、勝承夫の作詞であります。同曲に大和田健樹が「故泊」という歌詞をつけています。その他「喜びも悲しみも幾年月」があります。演奏したり、歌詞の違いをしてみる。その他、これから日本人が生きて行くという観点からみれば、日本が高度に工業化が進んで、これからはものづくりから、知識や技術を持って世界に貢献していく、豊かな社会あるいは日本人としては、明治時代に外国人が日本に果たしたように、役割を色々な分野で世界中で果たすことが期待されてるといえます。色々あわせて勉強できる指導案を私どもで作って、それを小学校、中学校、高校に提案する事ができる。地域から、学校の外から総合学習に貢献できる。こんなことをロータリーが、やってもいいのではないかと思います。

河合：

総合学習については、内容はなんでもいいと思います。子供達がいま、古橋先生がおっしゃったように、自分達で何かテーマを考えて、解決していくか、調べていくかと自主的にやっていく。プログラムを組めるようにしてやればどんな内容でもいい、キャンプでも、地域のことを調べるのもいいと思います。子供ではなかなかできないので、それを大人がアドバイスをして、達成できるようにしてあげる。プロセスを学ぶことが総合学習で非常に大切で、古橋先生のしていることはすばらしい総合学習だと思って聞いていました。自主的にいろんなものを解決していく力を養っていくことが。先程生きる力という話が出ましたが繋がっていきます。学力低下論の話とからめると時間を総合学習でいっぱい取っちゃったら算数を教える、数学を教える時間が足りないと言っていますが、教育のシステムとしてカリキュラムを教えなければいけないとか、範囲を全うしようと考えてるの

が間違いで、どう乗り越えていくかを自主的にやっていく手法を教えてやれば、学習は自分ですと考えるのです。数学がもっと必要だったら、自分でやっていくと思います。総合学習で培った生きる力を自主的に、自発的に進めていく力、テーマを自分で見つけて解決していく力を養っていけば、学力低下の問題を解決してしまい、その範囲を全部教えることは全くないと思うのです。むしろ総合学習をもっと増やして、「自主的な生きる力」をどんどん作ってやるべきと、私は思います。

見城：

そうですね？何か、どうでしょうね。どうですか？教育長というかしっかり教育を受けてきたお立場としていかがですか？

今村：

そういうわけでもないんですが。文化庁が文化庁月報という雑誌を出してまして、今、文化庁長官を河合隼雄さんがされているのですが、一文を寄せられてまして、たぶん「くるたのしい」だったと思うんですが、単語を創られました。さきほど登山をしたお話が出ましたけれども、あれもすごく苦しい経験をした後で、朝日が見えるとか達成感が得られる。その楽しさを感じる元に、やはり「苦しいんだけど、努力をした、忍耐をした」という経験があった。人間が何かをするときに、楽しいと思える裏に辛さ、苦しさがあると話をされてます。河合先生は、ボランティアはまさにそうである、ボランティアっていうのは非常にいい事であり、やらなきゃいけないという風潮があるのですけれども、やはりボランティアっていうのは楽しまなくてははいけない。おもしろおかしい、楽しいだけではなくて、辛い苦しいこともあるが、そういう意味で確かに、「苦楽しい」、ボランティアというのは「苦楽しい」ものだという言い方をされてました。

中 略

学校の勉強というのは、楽しいことだけじゃなく



て、いわゆるいい大学に行ったといわれている私でさえ、学校の勉強が全部楽しいと思ったことはないです。はっきりいって、学校の勉強は忍耐と根性だと実感しております。ただ、私は幸いなことに、ある程度忍耐と根性があり、それなりの点数がとれたことで、ある程度の達成感を、一応幸せにも感じる事ができたということで、続けられたという点はあると思います。ただ、個人個人そういうことで達成感を感じられる子供と、そうでない子供がいるので、いわゆる知識の量等だけの勉強だけを重んじると、そこからあぶれる子供がいる。その子に対して、学校教育に対して批判的な目が向けられるというのはいたしかたないと思います。基礎基本の部分といいます「読み書き」は、忍耐とか、ちょっとしんどいという思いを全くしないで身につける子供はなかなかいないでしょう。ほっとけば興味を持つ所を見つけて勉強するまで待つべきだとは、一概に言えないと思ってます。ある程度苦しい、なんでこんな事しなければなんないんだと思いながらやっていく中で、まさに苦しい中で本人が、その楽しさをみつけた瞬間から、子供が苦しいけどやってみようかって思う気持ちに移っていきえると思ってます。先生方がたぶん日々苦勞されながらその段階まで持っていけるまで、仕向けていらっしゃるんだと思います。総合学習はまさに「苦楽しい」瞬間というのを子供が味わいやすい、時間枠と思ってます。私も総合的な学習の時間は非常に期待をしています。

見城：

ようやく、学校でも認められて、今までもいい先生は時間を作っていたんです。各地いろいろ調べますと、これは農業をしている方が教えて下さいました。ブタを飼ってるんですが。子供達が訪ねてきて、最初の頃は心ある先生が、「生きる」とか「死」それから「なぜ人が生きる事ができるのか」というのは「生ある、つまり命あるものをいただいて生きてるんだ」ということを教えたい。

最初に学校から生徒をつれて見にいらした。子供達はブタを見て、「わー」って驚いたとか、ウシなんかみて「ぎゃー」とか「汚い」とか「こんな汚いの、自分達はきれいな牛肉たべているつもりだった」生きてるウシ見て驚いたとか、しっぽがどうしたとか、最初言ってるんですけど。それでだんだんその方が、もし自分が子供たちに何かを伝える事ができるならば、酪農の方が始めたことは1泊2日で子供を受け入れる。最初来たとき子供は「きゃー」とか「臭い」とかかって、少し落ち着くと、生き物に愛おしさをおぼえて、だんだん夕方頃は「かわいい」だのいうのだそうです。そして授業として解体をさせるんです。私はそんなの見た事ないから「わー」とか「きゃー」とか言ってしまおうと思うのですが、子供たちは「きゃー」とか「かわいそう」とか言います。それでも、「このウシが生きてきたことに、意味があるというのは、だれかにこの自分の命を与える。生を与えることで、無駄に死んでいくんじゃないのよ」という意味で、一緒にウシとかブタの解体をするのに付き合わせて、肉を夜出すと、みんな今まで簡単に食べてた肉が食べられません。また話をして、「あの時まで生きてた動物達は、意味がなくなるでしょう」「何の為にこの命を差し出してくれたの？」と、子供が帰るころには納得していくのでしょうが命のあるのを殺して、人っていうのはむごい、ひどいといっているながらも、それで自分が生きてる、2日間でそこまにならなくなって帰ってきます。評判を呼んで、学校から申し込みがあって、地域として今度、周りの農業の方達が手伝って、作物も大根は土の中にあって白いとか、みんな驚くらしいです。何で、白いのかなど、やっとわかります。学校の先生が思い付くものにも限りがありますから、やはり、みなさんの側からも提案していただくといいのは重要ではないですか。学校の先生の智恵袋にも限りがありますでしょ？



古橋：

限りあってこれを探すのに、何日かかって寝ずに考えるのが現状です。いろんなお知恵をお貸しいただければ。

見城：

みなさんその宝庫だと思います。ロータリーの方たちがお持ちの経験、現場は大事です。

古橋：

ほんとに助かります。

見城：

ということですが。そろそろ時間も終わりに近付いてきたようですから、これだけはぜひということございますか？今日、この場にきたらこれだけは言って帰りたかった。どうぞ。

今村：

先程から、結局家庭の躰じゃないかと、話にちょっとなりかかったことがありましたが、その時に思うのは、私が住ます白井市というのは、今、ニュータウン地区に住んでる方が多いのです。そうしますといろんなところから移り住んだ核家族が多いものですから、各家庭のつながり、地縁みたいなものはありません。公民館の事業で、若いお母さんのサロンを開いて、子供を2時間くらい預かり、その間井戸端会議みたいなことができるものを設けてます。非常に人気が高いです。そこに指導主事学校の先生がお話の聞き役に来ます。そこで若いお母さんが涙を流して話します。何を話すかというと、非常に些細な事で、ウチの子がちょっとまだこういうことができません。と話をするだけです。それで何か解決するわけではないのですが、涙をぼろぼろぼろ流して話します。なぜそうなるのかと考えますと、私自身もそうで反省してるんですが。我々の世代は○か×です。物事を何か正解があって、そこにたどりつかなくてはいけないというプレッシャーがあります。考え方として、くり返しくり返ししてきましたから、そこに達しなきゃいけないって、プレッシャーが

あるんです。まわりに聞くのもちょっとはずかしいというのがあります。

見城：

優等生的ですよ。

今村：

聞ける相手もないということもありまして、多分サロンに行く事自体もかなり勇気がいることだと思います。そこにいて、話を聞いてくれる人がいたことでうれしくてホッとして、涙を流すということなのだと思います。お母さん方はいろんな緊張感の中で子育てをしています。教育委員会としては、お母さん方が躰に対して、自分自身がプレッシャーがあるのにそれに対して上塗り、家庭がいけないんだ、躰がいけないと言っても効果はない。むしろ逆効果だろうと思います。いい形でお母さん方が子育てに前向きに取組む環境をどう作っていけばいいのかなと考えています。お母さんといってしまうのですが、お父さんの参加というのがなかなか見えて来ないのです。白井市の場合は圧倒的多数が東京にお勤めです。市役所にいても、お父さんの姿はほとんど見えません。一部の学校ではPTAの中に「親父の会」を作って力仕事を中心に担当して下さるお父さん達もいらっしゃるんですが。なかなかお父さんの姿が見えて来ないので、まずお父さんは、ぜひお母さんの話を聞いてあげてほしいと、その思いがひとつありましたので、きっとロータリークラブにいらっしゃる方はお父さんが多いと思うので、お話をさせていただければなと思っていました。

見城：

大事ですね。お父さんの参加ということ。はい、ありがとうございます。どうでしょうか。

古橋：

今、とても感謝の気持ちを持っております。学校でなにかやろうとした時に、PTAの方とか、地域の方が受け入れて下さったおかげで子供達がい



た。学校だけではできないと、実感しております。本校のPTAの中で本部役員の方はお父さん達が多くて、先ほどの親父の会ではないですが、学校行事に沢山参加して下さいます。イモ畑を作って、イモを作って、収穫祭、芋掘りに、一緒に参加して下さい、子供達の様子を見ています。総合学習でこちらから外へ出ていく部分もとても意味がありますけれど、開かれた学校ということで、お客さんの多い、たくさんの方が学校に来て、とにかく子供達の様子を見ていただける機会が多いと思います。子供の様子を見、教室の様子を見、昨日も終わってPTAの方達が、「ご苦労さん」とご馳走していただきました。「ちょっと集まっているから先生飲みにおいでよ」と職員室に電話がかかってくる学校です。ちょっとお寿司をいただいて帰ってくるのですけれど、そういう場で「俺たちが守ってやるから先生は好きな事やっていいよ」「大丈夫だよ」「どんどん怒っていいよ」というような言葉を、保護者の方からかけていただくとホントに教師は、やる気を持って「あ、じゃあもうちょっとがんばってみるかな」という気持ちになります。そういう気持ちで支えて頂けることにもすごく感謝しております。大人でも誉められると嬉しいし、子供も誉めると喜んでやるし、子供に「いいお母さんだね」とやるといつも怒られてるけどにこって笑います。お父さんとお母さんの仲がいいと、子どもたちは逆らいません。非常に素直に教師の言う事を聞いてくれます。そういう意味でお互いに信頼関係を持っていることは、とても大事な事と考えております。

見城：

はい、ありがとうございました。仲田さんや河合さん、さっきはロータリーへの注文をおっしゃったんですが、最後にどうでしょうか。

仲田：

私共は、学校をとりまく環境のひとつとしてのロータリー、あるいは地域という立場から、小中

学生といった年少だけではなく青少年まで視野に入れて、我々に何が出来るのだろうか。あるいは私個人として、どんなことを考えているかを最後にお話したいと思います。いまの高校卒業生の就職率は50%、という大変厳しい時代です。一方ではフリーターというような、いわば遊民といえますか、生活様式、文化を持った若者達が、なんとか食べていける状態、非常にギャップがあると思います。しかし、いつまで日本の社会が定職をもたないアルバイトで一生活つないでいこうとする考え方の人たちを抱え込んでいられるんだろう。大変疑問に思います。小中高大学と教育の機関がありますが、なにが一番大事かと言うと、やはり働く。しっかりした職業をもって、自分の一生を貫くこと、どんな職業でもいいけれど、とにかく働くことが大事な事だ。少なくとも家庭や学校地域を通じて、あらゆる機会に教えていけたらもう少し明るい日本が展望できたのかなと思います。いままでの社会は、運動会の棒倒しのようにみんなが群がって、一つの成功者のコースがあって、いい大学、いい会社、そしてお金持ちになる事、社会的な地位につく事。だれもがみんな、ひとつのコースしかなかった。学校の中でも、普通の先生から教頭、校長になって教育長になる。教員社会の一つきりしかない単線の人生航路というのがあったと思いますが。これからは人それぞれの生き方があり、複線的な生き方というものを認めた上でしっかりした職業観を持って、一生を送れる社会に日本をしたいと思います。あらゆる機会に訴えていきたいというのが一つです。もう一つ、世界中を見回してみれば、日本は大変恵まれた国と現在の状態でも思います。我々が持つべき、日本人一般としての価値の一つとして、ノーブレス・オブ・リッチといえますか。恵まれたものの責任の原則を意識すべきではないか。世界のいろいろな国の人々の平和と福祉のために各々の分野でできる事をやっていく。先程の外国人が明治維新には



たした役割を今度は日本人が世界にお返ししていく事、この考え方を、私の青少年教育の目標の柱にしたいと思っております。

見城：

ありがとうございました。はい。

河合：

私が言いたいこと、最後にロータリアンとしての意見等を言わせてもらって終わりにします。私が言いたいのは、倫理道德の問題です。信仰心の問題は非常に重要だと思っております。昔の日本は信仰の厚い国だったにもかかわらず戦争を通して、反省があって信仰を、排除してきたわけですが、じつは外国では、キリスト教の信仰は非常に根付いて、韓国でも子供達の生きていくバックボーンにも、育っていくバックボーンにもなっています。奉仕の理想、奉仕の心もその中から出てきてると思います。ですから早急に信仰の復活、どんな宗教でもいい、信仰心を中心に据えていくことを僕は考えていくべきと思います。それから最後にロータリアンとしてですが、ぜひ総合の学習の時間にはロータリアンを活用してください。専門家がたくさんいて、やりたくてうずうずしてる人がいます。いい結果が出ると思います。特に船橋西ロータリーの皆さんはやりたがってますので、是非ご活用をしていただきたいと思いません。私達は奉仕の理想がロータリーの基本的な考え方ですが。それはとんでもない事をするわけではなくて、身近にできることからきちっとやっていくこと、ロータリアンがきちっとやっていくこと、できるものからひとりひとりがやっていくことではないかと思いません。子供たちのためにホントにできることから、何か、手を出して、骨を折って、汗を出してやってくことがホントにできる。それをロータリアンがまず実践して地域に広げていくことではないかと思いません。ロータリーのマークはここにありますように歯車です。歯車というのは回転して、はじめて歯車になるわ

けで、絵に描いて壁に貼っていても歯車にならないです。我々ひとりひとりがピチャイ・ラタクルさんがいう、草の根ロータリアン活動をやって、ロータリーの歯車を回していく事が必要ではないかと思いません。

見城：

ありがとうございました。最後にロータリアンとしての熱い思いを語っていただきまして、皆さんから提案していただくことがいかに大事か、学校の先生が考えて、皆さんの所に一人ひとりっていうのも生徒にとって大事です。今日のテーマは、「人間性豊かな青少年を育てるために我々に一体何が出来るか」ということで。ぜひ、みなさんの方からでも一歩出て頂きたい。その時に御専門を教えて頂くことはもちろんです。先程、宗教というような言葉でおっしゃいましたが、ホントに日本にある良さ、つまり「お天道様に顔をそむけるようなことはするな」とか。いろいろ、日常生活のなかで大人が教えてくれた善悪の規範のようなものがあつたと思うのです。そこが、一時期、学校は学校、家庭は家庭。しかし家庭は忙しくて、若いお母さんはそんな事知らないから、先ほどのお話ではありませんが、初めてそういう場があって、涙流して自分の事聞いてくれる人がいたという現象がおきるのではないのでしょうか。いままで大人として、皆さんは自信をもって生きてきたと思います。多くの日本人が自信を少し失って自分が出る場じゃない。若い人にまたバカにされるかもしれない。こんなような思いから、口をこう開かずにいる部分によって日本人が忘れてたり、欠落してきたものが多々あるんじゃないか。もう、教育は教育の現場で専門的にやって頂いてということがあり、もう5割が大学に進学する時代になりました。家庭では、なかなかいままでのように、教え込んでいけるじっくりした場もなくなっています。そこで、今脚光をあびているのは地域、大人達だと思います。ぜひここは一つ自信をもって、



何かあつたときには声かけて、誰かが「何いってんだらうこの人」って言ったら「ああ、わかってないんだなあ」っていくことで、もう一回粘り強くですね、昔からある日本の良さのほうを伝えていく。それが日本人としての人間性豊かな青少年が育っていく力になるのでしょうか。きょうはちょっと時間も押しましたが、パネリストの皆さんの様々なお考え、本当にありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。

